

2021年度 北海道大学大学院
文学院修士課程入学試験（前期）

試験区分	<input checked="" type="checkbox"/> 一般入試 <input type="checkbox"/> 外国人留学生特別入試 <input type="checkbox"/> 社会人特別入試（後期のみ）
試験科目名	<input checked="" type="checkbox"/> 専門試験（ 日本古典文化論 ） <input type="checkbox"/> 共通外国語（ ）
出題の意図	<p>問題一は日本文学・日本文化研究に関わる分野から、その文学史・文化史的、あるいは国語史的問題に関する理解と知識を質すと共に、文章読解能力及び文章表現能力も併せ見るものである。</p> <p>問題二は日本古典文学研究における最も根本的な作品読解能力を問うものである。また、原資料を取り扱う能力を見るために変体仮名の翻字も課す。</p> <p>問題三は日本古典文学研究に必要かつ重要な能力である漢文読解能力を問うものである。</p>

2021年度
北海道大学大学院文学院修士課程入学試験問題（前期）
（専門試験） 日本古典文化論 全5枚のうち1枚目

この試験では、試験問題 5枚、解答用紙 3枚を配付する。問題は三題あり、解答は問題一・二・三についてそれぞれ別の解答用紙を用いること。枚数に不足がある場合は、手を挙げて試験監督の指示を待つこと。

問題一

次の文章は中村幸彦「近世的表現」の一節である。これを読んで自分自身が興味関心を持つ観点から考えるところを自由に述べよ。

* 問題本文は著作権法上の理由からこのホームページに掲載することはできませんので、左記の出典箇所を参照するか、文学事務部教務担当の窓口で閲覧してください。

出典 中村幸彦「近世的表現」『中村幸彦著述集』第二巻、中央公論社、昭和五七年、一四八―一五〇頁

問題二

次の文章は謡曲「草薙」の一節である。読んで設問に答えよ。

マ「これは比叡山に住む恵心僧都にて候。我此程尾張の国鞆田に参り、一七日参籠申し最勝王経を講じ奉り候。又ここにいづくとも知らず男女の候ふが、草花をもちて来り候。今日も来りて候はゞ、いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。シ・シ「ほとゝぎす、花橋の香をとめて、鳴くやと月の、あやめ草。シ「是は上野に見ゆるかの岡に草を刈り、売りて命の露をつぐ広村の野人にて候となり。シ「これもちそふ夏衣、襲の袖は碓氷山、隔てし中を忘れねば、美さく花さくときはに売る、橋の童女にて候。シ「夫れ人間の容貌は、朝に栄え夕に衰へ、電光石火の光の影

明は暮れて、限りや涙なるらん。(中略) マ「いかに申すべき事の候。方々の持ち給ひたる草花の名を承りたら候。シ「なうなう此橋召され候へ。シ「此草花召され候へ。色々の、地「色々の、草木の数はしら露の、枝に露はおくともなほときはなれや橋の、めままし草の戯れ。御僧の身には何事もつゝむとしはなくとも、説き置け法の古を、忍ぶ草を召されよや、忍ぶ草を召されよ。マ「扱々御身はいかなる人ぞ、名を御名乗り候へ。シ「先づかやうに承り候。御身はいかなる人にて御座候ふぞ。マ「是は比叡山にすむ恵心の僧都にて候ふが、当社に参り一七日最勝王経を講じ奉り候。シ「さては有難や我らが望む御経なり。シ「我久しく当社の権扉を押し開き、とこしなくに国家を守る。シ・シ「然りといへどもなほ五穀を成就せしめ、人壽円長なる事を求むるに、唯此経の徳ならずや。シ「又我等二人は夫婦の者。或は草薙の神剣をまもる神となる。シ「又は蓬が島とかや。と世のこのみの名をとめて、齡を延ぶる仙女となる。シ「七日の御経結願の夜、地「燈の影に立添ひて、姿をまみえ申すべしと、語れば白鳥の、嶺の薄雲立ちわたり、風冷じく雨落ちて、暮れ行く空は薄曇の、かき消すやうに矢にけり、かき消すやうに矢せにけり。

問一 傍線部イの歌は、次の歌を本歌とする。

五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする(『伊勢物語』第六十段・『古今和歌集』夏歌)
ほとゝぎす鳴くやと月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな(『古今和歌集』恋歌)

右二首を踏まえ、イの歌の「ほとゝぎす」は誰のどのような境遇の比喩と考えられるか説明せよ。

問二 本文中のくずし字の箇所を翻字せよ。

問三 傍線部口について、a. 「説き置く法」とは誰の説き置いたどのような法か。b. それを踏まえ、「めざまし草」とはこの草のどのような性質を表す呼称と考えられるか、説明せよ。

問四 この後、シテ・ツレの正体が明かされる場面くとつづく。シテ・ツレはそれぞれ誰であったと推定されるか、記せ。

問五 この作品またはシヤシルの文学史的意義について、自由に述べよ。

問題三

次の文章は唐の陳鴻撰『長恨伝』の一節である。読んで設問に答えよ。

適有道士自蜀来。^A知上皇心念楊妃如是、自言、「有李少
 之術。玄宗大喜、命致其神。方士乃竭其術以索之、不至。
 又能游神馭氣、出天界没地府、以求之、不見。又旁求四虚
 上下、東極天海、跨蓬壺。見最高仙山、上多楼闕。西廂下
 有洞戸、東嚮、闔其門。署曰、「玉妃太真院」。方士抽簪叩
 扉、有双鬟童女、出応其門。方士造次未及言、而双鬟復入。
^C俄有碧衣侍女又至、詰其所従。方士因称唐天子使者、且致
 其命。碧衣云、^D「玉妃方寝、請少待之」。

注 竭 つくす。

楼闕 やぐらのある門。

西廂下有洞戸 西の建物の下に広々とした戸口がある。

嚮 むかう。

闔 とじる。

問一 傍線部 A・D を平仮名だけの書き下し文に改めよ。

問二 傍線部 B 「李少君之術」とはいかなるものか、説明せよ。

問三 傍線部 C をわかりやすく訳せ。